

氷の季節によせて

川崎千東



茅誠司先生は、その著書で、「生活が科学化されただけをもって、科学的であるとは言われない。科学的であるというの、身の回りにある一つの疑問から次の疑問を引き出し、さらに次の疑問へと移ってゆく科学的性格の所産であって、一番大切なことは、創意工夫である」という意味のことを述べられている。

私は、さらにそれに「心のナイーブさ」をつけ加えさせていただいて、幼いひとたちは皆、本源的には、科学的であると強調したいのである。

それが、科学者たるべく志向する人たちを除いては、次第に活字の科学知識に陥ってしまうのは、科学を一途に、教育化するからではなからうか。

まず感じ、不思議さに魅せられ、それを追求する心構えを大人になっても失わなければ、科学は、もっともっと振興するの

ではないかと、幼い心のナイーブさに接する度に、思うことである。

オーバーの襟を立てて通勤、ストロブの面倒をみているうちに、「先生々々、ほら、こんな厚い水！」小さい手をまっかにして、厚い氷の破片を、満面に笑みをたたえ、さし示す子どもたち。この子どもたちの敏感さに、全く驚いてしまう。保育者は氷片を示されてから、「今朝の冷えこみでは、これ位の厚い氷は……」と合点するのが常である。子どもたちは、幼稚園の玄関に入る前に、既に、通用門に近い高校の瓢箪池に立寄って、あらゆる手段をこうじて、底まで張りつめた氷を破って、保育者に示す得意の場面となるのである。

子どもたちに誘われて池に行ってみると、氷の上を危っかしい足どりで渡り歩いたり、転んだり、見ているだけでも楽しさが伝わってくる光景である。

「駄目だよ。そんなに氷を持ってっちゃ」

「いいんだよ」

氷滑りの一群とは別に、石ころや金槌で氷を叩きわり、不揃いの氷片を車に積んで、鬼ヶ島帰りの桃太郎よろしく、掛声をかけながら幼稚園まで運びこむ数人もいる。その車は歓声に迎

えられて、その氷片をみんなぶつつけたり、叩いたり、落してみたり、果てはバケツに入れて、野球のバットで叩きこみ、お餅つきだといって粉々にして喜ぶのである。エネルギーの発散と破壊の本能の満足であろう。粉々にされてコンクリートの上に散らばっても、氷片は美しい。冬陽を反射して、ダイヤモンドのように輝いてみえるのである。

「あら、きれいな！」女の子は、ハンカチを出してその破片を拾って包んだりしている。ハンカチの中の氷片がとけてしまつたら、美しいものはかなさを識ることになるであろう。毎年くり返される、厳冬の豊かで楽しい遊びである。

ある年の実習生の実習日誌の中で、「池の水とりは危険である。肩まで落ちてしまつたら、どうなるだろう」との記事を見出して、私はまさに、寝耳に水の驚きであった。

大学のキャンパスの中に、直径約五メートル、水深一メートル程の丸池がもうひとつある。私は試みに年長の子どもたちに質問してみた。

「大きい方の池には水が張らないで、小さい方の池には厚い氷が張るのは、なぜ？」

「大きい方の池にはね、噴水があるから」

「そうねえ、でも、お正月がすんでからは噴水はとめてあるの。それでも、なぜ氷が張らないのかしら？ 不思議ねえ」

「ああ、わかった。大きいお池は大きいから」

「オヤ、どうしてそう考えたの？」

「だって、この前、バケツにいれといたお水は氷にならないで、プリンのお水のものに、セロハンをきざんでお水をいれておいたら、花水ができたもん」

「よくわかったわねえ。小さい方はお池が小さいから、プリンのいれもののように、氷ができるのね」

「まだあるよ。大きいお池は深いから！」

「小さいお池は浅いもんなあ」と唱和するように、口々に確信にみちて言うのであった。春、ゼラチンに包まれた食用蛙の卵をとりに行つて以来、馴染の池である。水深は、体験をもつて確かな知識となつている。

実習生も結氷に就ての知識は、活字の面では理解していたのかもしれない。その誤りを指摘する前に、私自身も、主として活字の科学教育をうけてきた旧い時代の人間として、フランクに対象と取り組んで、生々とした感覚を甦らせたものである。

(東京家政大学付属みどりヶ丘幼稚園)